

「癌患者の症状のコントロール」

武田 文和 編集
石垣 靖子

佐賀医科大学助教授・総合診療部

福 井 次 矢

本書は、癌患者のホスピスケアに先進的に取り組んできた2つの施設の医師とナースによって書かれた、癌患者のケアについてのマニュアルである。書名になっている、癌患者の症状のコントロールのしかた(第2章)には全ページ数の約3/4が割かれていて、わかりやすく、具体的な症状緩和の方法が示されているが、その他の章(第1章癌患者のみかた、第3章癌患者の在宅ケア、第4章家族のケア)の内容も大変素晴らしい。

第1章では、全人的ケアの真髓を簡潔に述べると共に、ここ数年間話題になっている医療従事者の側の精神衛生について原因と予防対策を示

している。第2章では、癌患者の種々の症状について、コントロールするうえでの基本原則は「患者の自覚症状の軽減を第1に考えること」であることが繰り返し述べられている。第3章の在宅ケアについては、その現状と展望が、第4章の家族のケアについても、医師やナース、MSWの取るべき態度が示されている。

本書を一読して感じることは、全章を通じて症例が良いタイミングで提示されていて、非常にわかりやすく、しかも、実際にケアに当たっている医師やナースのみが表出できるような自信に満ちた内容となっていることである。医学教育の観点から

は、第1章は全人的ケアのあり方を臨床に即して簡潔に示すうえで大変有用であろう。また、第2章のモルヒネや抗精神病薬、コルチコステロイドの用い方など、この分野に精通している医師にとっては当たり前のことが、「患者の自覚症状の軽減を第1に考える」という基本原則がしばしばおざなりにされ、医師の側の原理を優先しやすい大学病院の若い医師にとっては、新鮮な知識となる場合が少なくないであろう。

従来、癌患者の緩和的ケアについての優れたテキストは、英国を始めとする欧米からの輸入であったが、本書はそのような欧米のテキストに匹敵するレベルのものとなっていると思う。したがって、病院の医師とナースが合同で輪読する実践書として、また、日々の癌患者ケアに当たって疑問点を解決するためのマニュアルとして広く用いられるよう、私は自信をもって勧める次第である。

● A5判変型 174頁 図11 1991
定価2,575円(税込)